博士学位論文審査要旨

２０１９年1月２８日

論 文 題 目：　「メキシコにおけるサパティスタ民族解放軍の研究―フレーミング論からの分析―」
学位申請者：　柴田　修子
審 査 委 員：
　主　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　松久　玲子
　副　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　菊池　恵介
　副　査：　グローバル地域文化学部　　教授　宇佐見　耕一

要　　旨：

本論文は、1994 年にメキシコのチアパス州で武装蜂起した先住民集団「サパティスタ民族解放軍（Ejército Zapatista de Liberación Nacional）」を研究対象としている。サパティスタ運動は、武力蜂起当初からインターネットにより、運動の経過を世界へ発信することで、国内外からの支持を得た。また、サパティスタ運動が権力を奪取することを目指さず、水平的なネットワークの構築を通じて社会変革をめざす姿勢により、オルター・グローバリゼーション運動の原点とされている。柴田修子氏は、本論文でサパティスタ運動の軌跡をたどり、フレーミング論を使って 25 年に渡るサパティスタ運動の継続要因を分析しようとしている。

本論文は全体で 202 ページからなり、以下の構成で書かれている。序章では、グローバル社会運動としてのサパティスタ運動の重要性を紹介し、本研究の意義と目的を明らかにした。第 1 章では、サパティスタ運動に対する批判的立場から肯定的立場まで振れ幅の広い先行研究のレビューを行い、フレーミング論を分析枠組みとして提示した。

第 2 章から第 4 章までは EZLN の結成から 2003 年以降の自治区の抵抗運動に至るまでのサパティスタ運動を跡づける作業を丹念に行っている。第 2 章は、ラカンドン密林が伝統的な先住民社会ではなく、入植による開墾地をめぐる農民運動の形成や政治的機会構造の変化を蜂起の背景として論じている。第 3 章では、サパティスタ蜂起後に政府との交渉が決裂し、自治区の形成に至る経過が論じられている。第 4 章では、柴田氏のアクションリサーチを通じた調査により、「良き統治評議会」のもとで自治区内の民主主義の構築を目指す過程が詳述されている。

こうした運動の過程を支えたのが、国内、国外の NGO と自治区の「良き統治評議会」のもとで抵抗運動を続ける農民たちだった。第 5 章と第 6 章では、これらの人々をサパティスタ運動へ継続的に動員した要因を、フレーミング論により分析した。第 5 章では、サパティスタ運動は、新自由主義不正義フレームと組織内の水平的関係と民主主義のあり方を提示するラディカル民主主義フレームにより国際的連帯を形成し、国際ネットワークの構築、国際オブザーバー、経済的支援などの人的・物理的資源を獲得したと論じている。また、第 6 章では、「良き統治評議会」が各自地区でおきた問題に対する告発や報告をまとめた文書を分析し、自治区の内部向けフレーミングを明らかにした。この文書の中で最も多くみられるのは、自治区の生活基盤となる「取り戻した土地」に関するフレームである。柴田氏は、外部に向けたフレーミングと内部に向けたフレーミングの「二重のフレーミング」がサパティスタ運動の継続を可能にした要因だと結論付けている。

最終審査では柴田氏による各章の論点報告の後、質疑応答が行われた。論文全体に対して、サ

パティスタ運動の全体像がわかる精緻な記述がされていること、国際連帯のフレーミングに対しては資源動員論を組み入れた分析が説得性があったことが評価されたが、一方で内部の運動継続要因がフレーミング論だけでは説明できず資源動員論を加えることで説得力が増すという指摘がされた。また、二重フレーミングの関係性や社会運動を分析する際の研究の立ち位置を明確にした上での検証が必要だという指摘がなされた。しかし、オルター・グローバリゼーション運動の原点とされるサパティスタ運動の全体像を明らかにし、運動の継続要因をフレーミング論により分析するという柴田氏の目的は十分に果たされたと判断した。また、サパティスタ運動勃発期には多くの研究が発表されたが、それを２５年にわたって俯瞰した研究はほとんどなく、社会運動論の視点から分析したという点で柴田氏の研究は高く評価できる。

よって、審査委員一同は、本論文は博士（グローバル社会研究）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

学力確認結果の要旨

２０１９年1月２８日

論 文 題 目：　「メキシコにおけるサパティスタ民族解放軍の研究―フレーミング論からの分析―」
学位申請者：　柴田　修子
審 査 委 員：
　主　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　松久　玲子
　副　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　菊池　恵介
　副　査：　グローバル地域文化学部　　教授　宇佐見　耕一

要　　旨：

柴田修子氏に対する学力確認は、2019 年 1 月 16 日（17 時から 18 時 30 分）に実施された。専門分野に関して、社会学、政治学、社会運動論の各領域から試問が行われ、同氏はいずれも的確に答えた。

研究に必要な語学試験に関しては、同氏が多くのスペイン語、英語を用いた文献を参照し、現地調査もスペイン語を用いて遂行したことから、十分な能力をもつと判断された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 「メキシコにおけるサパティスタ民族解放軍の研究―フレーミング論からの分析―」

氏　　名： 柴田　修子

要　　旨：

本論文の目的は、メキシコのチアパス州において1994年1月、サパティスタ民族解放軍(EZLN)と名乗る先住民による武装蜂起によって始まったサパティスタ運動について、運動の変遷を辿るとともに、20年以上にわたって運動を継続し得た要因を、社会運動論に依拠しながら分析することである。

グローバリゼーションが進んだ現代にあって、社会運動のあり方も多様化している。従来のようなヒエラルキー型で権力志向の運動ではなく、水平的なネットワークの構築によって社会変革を目指す、いわゆるオルターグローバリゼーション運動と呼ばれる運動がグローバルに展開している。サパティスタ運動はこうした運動の原点とされ、PGA や世界社会フォーラムなど様々な運動に大きな影響を与えたことは、世界的に知られている。しかし日本におけるサパティスタ運動の研究は少なく、ラテンアメリカ地域研究の分野以外ではほとんど知られていない。そこで本論文では、サパティスタ運動を社会運動としてとらえ、1994 年の武装蜂起に至る歴史的背景から蜂起後の運動の展開と国際連帯への広がり、2003 年以降の運動方針の転換と自治区の再構築に至る流れを検証することで、サパティスタ運動の持続性をローカルとグローバルの両面から考察した。

本論文ではまず、EZLN が蜂起に至るまでの歴史的過程を分析した。EZLN が結成されたのは、チアパス州南東部に位置するラカンドン密林地域である。ここで明らかにしたのは、EZLN が結成されたラカンドン密林地域は、「伝統的な先住民社会」ではなく、自主入植によって形成された新しい社会だったという点である。この地域では、カトリック組織や都市部出身の左翼運動家など、農民運動を促す様々なアクターが外部からもたらされた。その結果、ラカンドン密林地域では、土地やインフラをめぐる農民運動が盛んとなった。後に EZLN を結成することになる FLN もそうした左翼運動の 1 つである。FLN 以前に運動を展開した他の左翼運動との間に思想的に大きな違いはなかったものの、武装闘争を志向している点が大きく異なっていた。1983 年の EZLN 結成当初、参加する先住民はごく少数であった。

EZLN が支持を急速に拡大したのは、1990 年前後である。これは政治的機会構造の変化によるところが大きい。チアパス州では、1980 年代から牧畜業の発展とともに牧場経営の農場主と入植村との間に、土地をめぐる紛争が起きるようになっていた。さらにグアテマラ内戦の影響で避難民が大量に流入し、治安維持の観点から軍事強化が図られた。しだいに農民運動に対する弾圧も激しくなっていった。EZLN は当初いくつかある選択肢の一つに過ぎなかったが、農民の自衛の必要性と非暴力運動への限界から、武装闘争を唱える EZLN が支持を拡大することになったのである。もともと母体が弱かった FLN は、1993 年に先住民のイニシアティブに基づく運動を行う方針を固め、EZLN の最高意思決定機関として先住民革命地下委員会を設置した。

サパティスタ蜂起後チアパス州では、サパティスタに続く土地占拠運動が活発化する。政府はこうした運動を懐柔するため、各農民組織と個別に「農業合意」を結び、占拠された土地の合法化を行った。これにより 1994 年以後サパティスタを名乗った「ただ乗り」の村の多くは、1990 年代末までにサパティスタから離反していった。しかし中には村の意見が一致せず、サパティスタ派と非サパティスタ派に分裂する村もあり、また「農業合意」によって取得した土地とサパテ

ィスタが「取り戻した」土地が重なっている場合があるなど、土地問題をより複雑化する要因になった。

蜂起直後武力制圧を行おうとした連邦政府は、メキシコ内外の市民社会からの圧力で停戦を余儀なくされた。サパティスタは以後武器を使わず、膨大な数のコミュニケを発表し、市民社会との連携を強めていく。サパティスタが発表する文書を世界に発信する仕組みを作り上げたのは、チアパス州で活動するNGOや国際NGOだった。本論文では、国際連帯がサパティスタ運動に果たした役割を、1)インターネット情報網の構築、2)国際オブザーバー、3)支援プロジェクトという3つの点から分析し、国際連帯がサパティスタにとって重要な資源だったことを示した。

政府と停戦協定を結び、和平交渉を続けてきたサパティスタは、2000年12月の新政権発足後に実施された先住民自治をめぐる憲法改正に対する抗議から、2001年4月に政府との交渉を断念し、自治区を再編して内部における民主主義の構築に力を注ぐようになった。生活面では、1996年頃から激化した政府による「低強度戦争」に対抗するため、「抵抗生活」を続けている。「抵抗生活」とは、政府支援を一切拒否することを意味し、PROGRESAなどの現金支給の拒否のみならず公教育も拒絶して、独自の自治学校教育を行うようになった。

2003年に5つのカラコルの創設を宣言し、各カラコルに、サパティスタ支持基盤（BAZ）およびサパティスタ反乱自治区（MAREZ）の調整機関として善き統治評議会（JBG）を設置した。JBGの設置は、サパティスタ運動にとって大きな分岐点となった。対外的に前面に出ていたEZLNが後退し、JBGが社会運動組織として成立することになったからである。JBGにおいては、「政治家というプロはいらない」という観点から、MAREZから選出されたメンバーが輪番制でJBGの役職を務めるものとした。短期間で役職が交替するため、非効率な面もあるものの、透明性を高め、権力が集中することがない仕組みを構築し、水平的な関係に基づく民主主義の実践を続けている。

サパティスタが国際的な支持を得た理由として、「従いながら統治する」や「たくさんの世界からなる世界」など、標語化された彼らの政治・行動原理が人々の共感を獲得することに成功したことが挙げられる。サパティスタ運動における国際連帯へのフレーミングは、先行研究が存在している。本論文では先行研究の成果を踏まえた上で、先行研究では顧みられなかったEZLNの文書を用いて、どのようなフレーミングがおこなわれているかを分析した。

国際連帯に対しては、新自由主義不正義フレーミングとラディカル民主主義フレーミングにまとめることができる。新自由主義不正義フレームは、グローバリゼーションによって拡散された新自由主義が格差を拡大させ、人びとを苦しめているというものである。ラディカル民主主義フレームは、「従いながら統治する」という標語で知られている。権力奪取を求めない、異文化の容認、水平的なネットワークの構築という文脈で理解され、サパティスモの基本方針とされた。国家権力を奪取することで社会変革を目指すのではなく、市民社会構造の変革を目指す運動のあり方は、これまで反グローバリゼーション運動や左翼運動を行ってきた人々を惹きつけた。国際連帯支援は、サパティスタ運動を、物理的支援、初期の自治学校システム構築などの技術支援、軍事侵攻への抑止力など様々な面で運動の持続に貢献した。サパティスタの原理は、「それぞれの場で、それぞれのやり方で闘争する」というものである。新自由主義を不正義としながら、それに対するオールタナティブを提示しているわけではない。それにも関わらず多くの支援が得られたのは、チアパス州の支持基盤の「抵抗生活」が、ラディカル民主主義の実践としてとらえられたからである。

フレーミング論に依拠したサパティスタ研究は、国際連帯と関連づけて論じられている。一方、JBG内部におけるフレーミングについては、先行研究がない。そこで本論文では、これまで顧みられることのなかったJBG文書を分析することで、内部におけるフレーミングを明らかにしようと試みた。その結果、興味深いことが明らかになった。国際連帯において重要だった新自由主義不正義フレーミングが、JBG文書ではほとんど見られないのである。JBGにおいて不正義と

フレーミングされているのは、3つのレベルの「悪い政府」である。そこでは次のような論理が展開される。政府はメキシコ人民ではなく富裕層の利害を代表しているため、政府支援は先住民のためではなくまやかしである。準軍事組織を操っているのも政府であり、先住民社会を分断しようとしている。これに対抗する唯一の手段は、「抵抗生活」である。またラディカル民主主義についての言及はなく、「抵抗生活」の基盤となる「取り戻した土地」の重要性を訴えるフレーミングが行われていた。政治行動原理ではなく、具体的な資源を守ることが JBG 文書では謳われている。

ここで明らかとなるのは、サパティスタ運動においては、外部に向けたフレーミングと内部に向けたものと、「二重フレーミング」が存在しているということである。サパティスタ運動は、国際連帯とローカルな抵抗生活の二面性を持つ運動である。前者は後者の抵抗生活に希望を見出し、支援活動を行っている。後者は地域社会の中で、サパティスタであれ非サパティスタであれ、先住民としての共存を目指しながら抵抗生活を送っている。その際国際連帯からの物理的、人的、倫理的支援は重要であった。両者が合わさることで総体としてのサパティスタ運動が成立しているのであり、切り離して存在することはできない。このような二面性を可能にしたのが、「二重フレーミング」であったというのが、本論文の結論である。